
明治維新によりあらゆる価値観がドラスティックに変わる、その前に完成した刀剣の思想を、多少まとめる意味もこめて俯瞰してみたい。

▼▼我も斬り彼も斬る剣

私が近世剣術における刀剣の思想で、最も面白く、また特筆すべきと思っていることは、剣を、剣術である以上もちろん敵を斬るものではあるが、同時に我が身の内にある邪心をも斬るものであるとする思想である。

「我も斬り彼も斬る剣」とでも言おうか。

このことは、これまでに新当流や示現流を紹介した際に既に触れてきたが、その重要性からあえてもう一度特筆しておきたい。

どうもこういった思想は、特定の流派にみられるというよりは、むしろ当時の剣術界一般に認められる思想であったように思う。

例えば、当時を代表する武士道書である井沢幡竜いざわばんりょうの『武士訓ぶしくん』などにも、次のような記述がある。

靈劍は決断を表し給ふ。至剛無欲にかたどりて。内に私欲奸佞かんねいの心敵を滅し。外に邪悪暴逆の賊徒を誅し。

劍を、自らの内にある私欲やよこしまな心、あるいはおもねる心などを心の敵として滅ぼし、一方、身の外にある邪悪暴逆の賊徒をも誅するものとしている。斬るべき敵は自らの内外に二つあり、まさしく「我也斬り彼も斬る劍」である。

この一文は、そもそも三種の神器の一つである草薙劍の神聖性を述べる文脈のなかで語られたものであるが、既に紹介した大月関平が著した新当流伝書『兵法自観照』にはこれとほぼ同様の記述がみられるなど、剣術における刀剣一般のこととしてこういった思想が広まっていたと考えられる。

このことは、特に生死の境の場においてどうしようもなく危うい状態にある自分の心を、どう理想的な状態にもっていくかという剣術における喫緊きつげんの課題があつて、これを解決するその一つの方法として劍のイメージが有効に機能していたということである。

実際には武器としての片刃の太刀を持ちながら、太刀は両刃の劍の象徴であつて、片方の刃

は敵に向いているがもう一方の刃は自分に向いているというイメージである。その意味で、太刀は「我も斬り彼も斬る剣」であった。

▼▼二つの心と剣

剣術は基本的には敵を倒す技術であったからこそ心の問題が大きく立ちはだかり、剣術家はこれの解決に必死となった。そういった意味で、まずは剣術の中核に心法を置いたのである。

しかし、武士は江戸時代という平和な時代が続いてもこのことの追究をやめることはしなかつた。

みなしむりようえん

源了圓みなしむりようえんという日本思想史を専門とする学者が、その著書『文化と人間形成』の中で穿ったことを述べている。氏は、「剣法論は殺人ということを次第に離れて、死という極限状況における自己のあり方を極めていく方向を取ったように思われる」⁽¹⁾と指摘している。なるほどその通りである。しかしさらに、近世剣術では、生死の境という状況すら離れて、それを日常における心の問題へと転化し、これを剣のイメージをもって処理していくような方向へと展開していく。

例えば前に取り上げた示現流伝書『示現流聞書喫緊録』では、剣をもって三毒を斬ることを説いていたが、実はこれは日常の心の問題として述べられている部分もある。心の利剣をもって三毒を切断するべきことを述べた後に続く次の一文などは、その例である。

是を以て平日の言行をも助くべし。善を成して人不_レ知_也とも憂ふべからず。憂ふこと過ぐれば、貪欲_{どんよく}と成る。芸を習ひて人に不_レ超_えとても不_レ可_ら悔_い也。悔を過ぐれば嗔怒_{しんど}に近づく。貧に迫るとも不_レ可_ら歎_く、事過ぐれば愚痴_{ぐち}と成る。

(心の利剣をもって三毒を切断することは) 平日の言行を助けることになる。例えば善い行いをしてそれが人に知られることがなくても憂いてはいけない。これが過ぎると貪欲となる。芸を習って人より上手になれなくても悔いてはいけない。これが過ぎると瞋(嗔)怒となる。貧乏でもこれを嘆いてはいけない。これが過ぎると愚痴となる。

以上のような内容であるが、明らかに生死をかけた勝負の場面とは異なった、日常の事柄である。

■註(一) 源了圓『文化と人間形成』第一法規出版、一九八二、九六頁。